



2109  
7

萬弥



扶桑皇統記圖會前編卷之四目錄

鑄大佛銅像

良辨僧正之傳

良辨僧正切とま大鷲おろし小櫻さくらの圖

近易石山寺建立あきま從奧あきま易始あきま獻黃金條

石山いしやま小良辨せうらへん釣つりをあきま翁おきなのあきま圖

聖武天皇崩御あきま惠美あきま押勝おしのかち諸君あきま罷事あきま

押勝君おしのかち罷あきま小誇あきま百官あきま有司あきまをあきま護あきまるあきま圖



感夢想太后儲浴室  
 改鑄新錢條  
 弓削道鏡朝恩と蒙る禮讓を廢と圖  
 惠美神降滅亡の事  
 弓削道鏡乱宮中  
 新帝淡路於請所崩  
 神靈路上救急難忠臣史  
 道鏡の内命を受清磨を害せんとして暴小天雷發る圖  
 光仁天皇御即位  
 道鏡於配所餓死條

目錄終

扶桑皇統記圖會前編卷之四

浪華 好華堂野亭參考

鑄大佛銅像

良辨僧正之傳

聖武天皇深く三宮小飯依りし己小諸國小國分寺と建りし其余寺院  
 伽藍を多く御建立ありしを猶又盧舎那佛の銅像と造りしを思ひ  
 多れども是ハ莫大小國財を費すと義ふれを如何有るんぞ。御飯依僧良辨  
 僧正此義を向ひしを多し。良弁謹んで勅答されしを佛像を造り  
 しハ其功德廣大无边して四海太平の御祈り。何更り是ハ勝りし君  
 費財を厭ひわが普く天下の人民ハ一紙半錢の寄附を勸めしを  
 是多れを多く聚り佛像速く成就し。佛像供養ハ一人の  
 他力の信絶こそ如来の御本願小叶ひの巻りと勸めしを多し。御后光





よしも。よしも。脚勸あり有る。帝遂小睿慮を定り。行基僧正と以  
緒國を勸進させり。其勸進帖の文曰

朕薄徳と以て恭しく大位を承志し兼濟を存し。勤めて人物と  
撫率土の濱己小仁恕小霑と以て。而も普天の下いも法恩  
を給つ。誠小三密の靈威小頼て乾坤相泰。小万代の福業を修  
成。采人事と欲と。與小菩薩の大願と發と。盧舎那佛金  
銅の像一軀を造り奉り。利益を蒙り冥福を祈んと欲と。此事  
小依て敢て百姓を侵し擾さざり。強て聚斂せしむる。更勿も遠  
近小朕が意せ。告知り。一針一草の衆力を以て伽羅佛像を  
造立し。万民と共に佛果と受ふれ者也。

大僧正行基右の勸進文を捧げて。緒國の國司守護人より下市農夫

小い。る。や。で。普く勸進せられ。ま。我。も。く。と。公。小。應。ど。と。施。入。り。る。  
程。小。莫。大。の。財。宝。聚。り。る。帝。斜。め。と。歡。喜。し。り。脚。庫。小。積。所。乃  
金。銀。を。令。て。大。佛。の。銅。像。と。鑄。立。し。め。伽。羅。を。江。州。甲。賀。郡。小。建。立。さ  
せ。の。ひ。たり。是。行。基。僧。正。の。勸。進。の。力。小。依。と。ま。り。と。以。て。一。小。良。弁。僧。正  
の。帝。小。他。力。信。施。の。功。徳。を。勸。め。ま。り。功。小。依。り。抑。良。弁。僧。正。と。や。江。州  
志。賀。郡。の。農。民。の。子。り。り。又。八。當。才。の。比。死。後。母。の。手。小。て。育。り。れ。る。小。二。女。乃  
く。其。母。我。兒。を。懷。た。て。外。面。へ。出。來。の。葉。と。摘。つ。る。が。子。と。抱。へ。て。自。由。の  
か。ら。の。稚。子。と。草。上。ふ。お。ろ。置。己。が。隨。意。小。這。遊。む。せ。其。身。ハ。葉。の。葉。と。摘  
り。て。在。る。小。忽。比。良。が。出。獄。の。方。より。年。歴。大。鷲。一。羽。船。き。り。て。具。一。葉。子  
小。舞。下。り。草。の。上。を。這。回。り。花。を。摘。り。て。余。念。なく。遊。び。居。る。稚。子。と。は。と。執  
攬。ひ。て。雲。井。遙。小。飛。去。る。母。鷲。の。羽。音。小。孩。た。り。顧。れ。む。早。我。兒。と。執。て



遙々の天を翔り往ふど。何久以て致馬ふる。あまやと叫び我をすすめて  
田とも畦とも言ど追行るれも。何ぞ其経おんや。早就鳥の涙もえん。成  
れを。あつと叫びて泣く。又起つ。其方乃天をあめ北。然して魂あ人  
乃て。是より心乱きて。我屋へも立之。我子返せ。子と戻せ  
と叫び泣其所も。あつと憧れ行る。衣れたり。然る小平城乃東大  
寺小義淵僧正とて道徳勝。聖僧あり。心願の更あり。日く春日  
明神へ参詣せ。れる小或日例の。明神へ参詣せん。徒弟若堂あ。を  
を後へ社参あり。帰路小春日野を通る。年徑一杉の樹の梢小兒  
の啼声。僧正訝りて立停り。杉樹の梢を見よ。一羽の大鷲  
梢の枝小留り。人の小兒を扱て。兒を食んと。此角とよせて。列  
てハ此角と引て在る。僧正小兒を就鳥小食。八更と憐。梢小向ハ印を

結びて真言と唱られ。就鳥ハ是小恐。人兒を捨置て。飛去る。僧正  
も肩小掛。錦の九条袈裟をきて。徒弟們小四隅を持て。廣げ。後  
再び梢小向ハ真言と唱。行念せ。忽ち小兒ハ梢を。あつと袈裟乃  
上へ落下り。声をきて呼と啼。僧正を寄て見ら。小ニ。玉乃如。男  
子。自ら抱え。抱え揚ら。小即時小啼止。僧正の鼻を見て。完示  
くと微笑。僧正哀憐の心。何圓の維。子ハ知。就鳥小扱  
も攫。其父母ハ。悲を。圓所を。返り得。手  
を。東大寺。將て歸り。先小兒の衣服小出所。書記。有やと。攫  
る。小圓所を書。物。肌小掛。守。八歩の觀音の木像。有  
む。僧正初て心付。彼惡鳥。此小兒を。此角を。敢て。喰  
此佛像有。今始。觀音菩薩の利益。を。尊





良母正知  
大勢之權  
母之逐  
子往方  
氣中人

三言五言



とて押ひきた。又守囊小収とて小児の肌小掛何國の者の子とも知れぬ雛小返  
 んちうちかく。院の御所小乳汁のある女房有れむ。それ小預けて育させられ  
 つたひ。廿三の春過秋暮て小児ハ早乳離れをる年小かりなれ。寺へ  
 呼とて艱育せられ。それ尋る者もふたれ。七の頃より徒弟と  
 名を良弁と呼て。手跡素續をさせらる。小機勝と紀臆強。自余の小僧  
 よう遠小優りたる也。義淵僧正も所生の如く愛とて經綸を教らる。小一度史  
 なる字再び忘る。更かく。一を聞て十の知の俊也。かき名を僧正も感嘆せり。更  
 度度ありたり。斯て良弁十の小かりなれ。師の坊良弁を膝下。招れ結れ  
 たる。ハ你ハ二才の須臾鳥小加。れて春日野の杉の梢小在る。我助けて艱  
 育せり。然とも何國の雛子とも。父母の名も國所もあれ。是まで緒人小其更と  
 結り。の。就鳥小子と攫。とて人あを。我寺。尋の。来る。べ。生。出。と。

頼りわれ。今以て尋の。来る。者。も。け。れ。い。れ。你。が。又。母。の。生。死。定。ま。る。是。も。前  
 生の宿業。因とて。ろ。あれ。你。が。守。囊。の。觀。音。の。尊。像。を。又。母。の。記。念。と。思。ひ。堅  
 固。小。佛。道。成。修。行。て。又。母。の。二。世。安。樂。と。祈。り。且。一。切。衆。生。を。化。度。と。す。程。の。僧。と  
 あれ。よ。と。懇。ろ。小。鏡。示。され。れ。良。弁。ハ。推。心。小。師。の。坊。の。高。恩。を。感。じ。又。又。又。母。の  
 更。と。思。ひ。て。涙。を。流。し。你。の。て。て。ハ。就。鳥。の。館。食。と。成。り。此。身。成。御。助。け。下。さ  
 せ。上。此。年。来。御。艱。育。中。給。り。御。高。恩。の。せ。め。報。じ。ま。る。ハ。死。此。六  
 師。匠。と。又。母。も。崇。め。仕。さ。す。下。と。是。よ。久。益。志。と。属。し。糞。食。と。思。れ  
 て。經。綸。小。眼。と。睡。し。切。磋。琢。磨。の。功。を。積。む。程。小。年。の。長。き。る。小。應。心。と。字。業  
 追。進。し。緒。經。の。真。旨。究。め。と。り。限。も。な。ら。若。年。お。り。平。城。寺。六。大。寺。の。僧。中。に。

良弁小勝る博識なりと賞美せらる。小發達し。緒人の用ひ重く殊更。

那少勝るむろの能弁なり。禁裡院中撰家あ。よ。の。良。弁。と。結。有。



て説法させ御聽聞ありたり。斯て良弁三十才ありし年師の房義淵僧  
 正迂化せられり。其終焉の前良弁を枕辺に招かれられり。我に命終  
 の期来まり。你に学道成就と我跡を踐み足り。愈佛道修行小心を属し  
 万代まで名を後と知識と成よとて。數々の遺物を与られられ。良弁頂戴と  
 涙を流し。拙僧の幼稚の時。悪鳥の餌とありたり。師の御情。おて危れ一命と  
 助く。それより。以来御養育。預りし。鴻恩。おろく。念て。須彌山も尚低く  
 滄溟海も猶浅く。父も母も頼も。し。師も。今。一の御恩を。報。し。ま。す  
 別。ま。わ。り。と。度。の。悲。し。ま。と。海。注。の。涙。衣。の。袖。を。浸。し。歎。れ。れ。れ。義。淵  
 僧。正。身。を。練。也。會。者。定。離。の。金。言。維。久。免。る。處。也。今。別。々。と。も。終。小。西。方。無  
 為。の。都。下。飛。く。交。り。成。結。ん。ん。と。其。上。一。言。も。發。せ。れ。ど。端。座。結。印。  
 て。千。手。陀。羅。尼。を。唱。つ。て。遂。小。其。夜。の。曉。小。眠。る。が。ごと。迂。化。せ。れ。り。良。弁。を

も。め。多。く。の。弟子。僧。衰。涙。衣。の。袖。を。浚。り。か。ら。葬。送。の。宮。に。嚴。み。し。て。茶  
 毗。乃。煙。と。ど。か。い。ふ。る。を。れ。り。良。弁。師。の。坊。の。跡。に。繼。聖。武。天。皇。の。御。祈。乃。師。と  
 仰。が。れ。僧。正。の。官。小。任。せ。れ。土。天。子。より。下。万。民。を。小。尊。ま。り。身。と。お。れ。り。却。鏡  
 良。弁。僧。正。の。母。八。子。と。就。鳥。小。り。り。我。狂。と。行。り。現。心。も。わ。り。我。子。返。せ。見。を  
 戻。せ。と。呼。り。歩。行。れ。身。ハ。非。人。と。零。落。て。冬。ハ。寒。夜。の。雪。小。凍。へ。夏。ハ。三。伏。の。暑。小  
 蒸。き。あ。ら。日。本。の。中。の。高。山。難。所。を。尋。探。さ。ぬ。限。も。わ。り。已。小。三。十。年。の。春。秋。と。夢  
 現。も。わ。り。過。し。迷。ひ。回。り。て。山。背。國。定。の。ま。り。来。り。々。々。小。忽。然。と。て。夢。の。覚。り  
 ぞ。狂。氣。治。り。正。氣。付。て。不。斗。心。思。ひ。多。く。我。身。就。鳥。小。子。と。取。り。し。り。我。小  
 我。身。何。國。を。心。と。往。り。也。更。小。覺。し。就。鳥。小。取。り。我。子。の。生。て。現。世。小。な。れ  
 中。り。り。也。此。来。月。尋。の。迷。ひ。愚。ろ。も。借。も。れ。り。我。幸。と。狂。り。也。也  
 身を願。し。海。中。の。破。衣。を。纏。ひ。水。鏡。小。写。し。面。を。照。れ。頭。の。髮。も。雪



の色と変りて脱減面皴の波をたも齒もろろ抜落て向齒のこもる  
残り我ながら我もあゝぬ面貌あれは一向と憫はてせむく古郷のあはじ  
く渡守小び頼て船の便をまゝひ舳の隅小蹲まりて居々る小乗合の  
衆人の綫結まゝ瓜皮を東大寺の良弁僧正も當世稀ある大徳やま在  
まゝの彼僧正も二才の時就鳥小摺されて春日山の杉の梢小在一人とや緘  
小天より天降もひ一聖人と錯をしを帝の御祈の師と仰がれ院の御所  
撰家方も尊敬あつて平城七太寺の中の碩学と称せられまゝとめんを結  
合々も小と老女はるぐと想々るハ借も世よハ似る妻も有るものふ我子も  
二才のし鷲小取まゝも其僧正が鷲小さるる我見おてハあなやと疑  
ハ猶も積く尋問をまゝ舟内船ハ早岸小着て己が隨意立別は行去  
るる也(老女ハ本意なく思ひかゝる此上ハ東大寺へ往て余所かゝる僧正の

未歴正を尋問んと志賀も帰らむ其より平城行東大寺(到りてんる小門  
堀巍くくして玄關ハ此糸の幕より翠簾をうけ五七人の武士嚴重小  
並居られ申寄附金もあはむ也然も如何もと良弁僧正の御息をせと  
一月見申す平城の町家おて食と乞日東大寺の辺にうら窺ひる小弟  
三日の良弁僧正乘輿小駕從者大勢小前後を守せて東大寺へ出られ  
るる小乘輿の戸開て有るも老女送小所を隔られ僧正の横負をるる小  
何と申す稚息小覺ある申す思ひも聡と我見とも知がら身ハ非人零落  
更あれは釘をうけん申すも如何せんと思ふも小乘輿を早春日の社乃方へ  
行過ぐる老女大望と失ひ沈然とて其後に見送りて在るる小折も東  
大寺の寺中より一人の僧出来りたれは是幸ひと立寄て詞をうけ此般小言  
れ安おてやもいと憚り多くまゝも脚出家と見け脚尋りて其妻のい

白丸丸已圓入り



脚きくの届とりて生なむ世よに脚きく思しふ忘わすれぬと世よに哀あはれけふ言こと々々小こ僧そうの  
中ちゆう小せう是ぜ合が力りきおんんとん思しふも流なが石いし佛ぶつ徒だの憐あはれ深ふかく立たり我われ小せう尋じんと  
と何なに更さら々々とんれ此こ所ところハ脚きく門もん前ぜんとん人ひとの往ゆ及まげり尋じんる更さら々々とん我われ小せう  
て更さら々々我われ小せう徒だて来きまよとん自みづか分のぶん寺てら歸かへり老らう女にょと白あは砂すな呼よびいて借か尋じん向むか  
とん何なにある義ぎとん問とひ老らう女にょ答こたへて元もと此こ身みハ志し賀がの里さと小せう住すまい者ものあてい先せん  
年ねん二に才さい小せう成せい男子なんしと就しゆ鳥とり小せう取とりまよ狂きやう氣きして元もと三さん十じゆう年ねん許ゆる緒しよ國こくを尋じんる送ま  
ひいひい先せん頃ころ定じやうの渡わたりて不ふ斗と狂きやう氣きとんて正しやう氣きつれいひい古こ郷けうの志し賀が歸かへ  
らんと渡わた舟ふね小せう便べんをて乗のりいひい乗のり合がのり人ひとの物もの語ご小せう東とう大だい寺てらの良りやう弁べん僧そう正せいを  
二ふた才さいのり就しゆ鳥とり小せう撮とりま杉すぎの梢こがより落おちりい脚きく身みかりとん中ちゆうされいを更さら々々とん妻さいか  
見みおても脚きく在ありま思しひ其その手て平へい城じやうきまり毎まい日にち東とう大だい寺てらの脚きく門もん前ぜんと俳はい徊かい  
しとん今日けふ僧そう正せいの脚きく負ふをよとんおん拜をいひ何なにとん取とりま我われ小せう見みの推おし負ふ

似にたる所ところ有ありま不ふ覺かくいまも脚きく覽らんのり見み苦くく零おち落おちり此こ身みれば更さら々々とん問とひ  
もも叶かをん思しひ煩わづひなり何なに卒そつ脚きく僧そうの脚きく情じやうを以もつて此こ條じやうの更さらと僧そう正せい言こと上じやうて  
給たまはりまりたらやと真まこと實じつ小せうあらるは涙なみだとん小せう頼たのむる小せうぞ彼かの僧そう未いまだらなら夫つまの  
僧そう正せいの脚きく身み土つちも你あなたの物もの語ごと彷彿ふつぷとん然しかども世よ上じやう小せう似にたる更さら々々とん言こと上じやうて  
你あなたの其その風かぜ鉢はちふれた我われ小せう口くちより言こと上じやうるも憚おそれぬあらるはとん然しかどもとん你あなたの口くちより直ちか言こと上じやうて  
る更さら々々猶なほ以もつて叶かをんを以もつて我われ小せうの方ほう便べんを教しるはるは僧そう正せい頃ころ日にち脚きく祈いの願ねん  
あつと公こうの脚きく用よう多おほく日にち必かなく春はる日にち明あ神かみ脚きく糸いと緒しよとん下げ向むかひ二に月げつ堂どう乃なり前まへ  
たる年ねん徑みちる杉すぎ樹じゆの下したへて乘のり輿こを下くだり杉すぎ樹じゆ小せう向むかひ十じゆう念ねんと唱なむる杉すぎの  
の樹きハ僧そう正せい往ゆ昔こゝろ就しゆ鳥とり小せう取とりまいり砌せき小せう通とりまいり樹きありま人ひと号ごうけて  
良りやう弁べん杉すぎと称せうせり拙せつ僧そう你あなたが就しゆ鳥とり小せう兒こを取とりま三さん十じゆう年ねんが同どう緒しよ國こくを尋じんるは同どう  
次さい弟ていを書かき記きて遣つはりまり同どうの書かきとん彼かの良りやう弁べん杉すぎ貼はりま其その辺へ小せう



居て窺ひいゝを必定僧正の御目小とて、あなたを召きて巨細を御尋あつて、  
其時、その時輝ふ右の次第と言上られよとて、即時小老女が絡り、おもしろむを、役名  
交りし書紀てよれむ。老女大に悦び、よき件の書物を數度申頂丸、厚く禮謝  
を述て立出。教のて、良弁杉の幹小貼丸、其辺り小在て、ご窺ひ居り、その  
其翌日、良弁僧正八例のて、乘輿小駕、從者と召連て、春日明神へ参詣あ  
り。下向小良弁杉の下、奥より下。杉小向ひ陀羅尼を誦し、十念と唱られ  
たり。小幹小一紙の書紀を貼丸、僧正異々、徒弟小捲り、とせ、採上て見  
らる。小近、志賀の里の者、二十年以前、二才小なる男子と、鷲鳥小取、とれ  
よ。此年月、日本國中と、母の面、小東大寺の良弁僧正も、御幼少の、初就鳥小  
と、れひ。此杉の梢小居り、由人の物語、さよと、相似る、更あれ、積り、  
問、さり、ハ思ひ、いと、高貴の御身小、直小尋、問も、んや、ゆた、く。此書紀を御

目小けん、あ貼置、い也と書、良弁僧正、心小徹。若黨小向ひ、此書と貼丸、  
一者、此辺小在、を尋、りて、連き、れと、命する、小若黨、領掌。其、辺と尋、  
一人の、非人の、姥此方を眺め居り、其余、小人も、あり、れを、老女小向ひ、你の、杉の  
木小書紀を貼丸、者と不知、やと、問小老女喜、げ小杉の、木小書紀を貼丸、ハ妻  
お、ていと、答へ、れむ、若黨、真を醒、おか、る、立回、りて、其由と、僧正、ハ上、る、小其、音  
を、是へ、呼寄、よとて、近く、呼寄、きせ、はり、と見、らる、小違、の、髪、草を、束、とる  
て、乱生、身小、破列、衣と、纏ひ、と見、昔、げある、姥地上、小蹲、り居、る  
僧正、老女小向ひ、此書紀を、杉の、木小貼丸、ハ你、なり、やと、問、小老女、とり、頭と  
上、いう、小の、妻お、ていと、答る、僧正、とり、て、你、もハ、我も、幼少の、郎就、鳥小、とり、此  
杉の、梢小在、よ師の、御房の、御物、語お、て、はつ、と、是と、も世、小似、とる、妻も、あり、有、お  
ひ、你が、鷲鳥小、取れ、兎小と、如何、なる、證據、やある、と問、る、小老女、とり、會、ひ、此書紀



ていへむ。我兒お着せ八剎と綴り合せ針目糸にて肌小妻を縫い深絹の守  
囊小夫の念下佛ある一十八歩の観音菩薩の像を納て掛させられ其餘ふ  
證とを布れ品ゆいごとと言ていふ終る小僧正大い小脚喜悅あり。これと  
慥ちなる證迹なれ其守囊と見ふ非るりて。首小掛られ錦の守囊より  
又二ツの守囊と採出して見せられ老女手小取てお詮た見ると立女手縫  
小せ守囊小紐かくいとりおと僧正も且悦び且哀く。儲ハ号年尋の慈心  
我母おて在くくや我いす。東西を弁する時鷲ふとこれ小悪鳥の  
餌とあふく。小師の御房の恵とて危た一命と助る。刺へ師匠の慈悲小  
依て成長する小付。実の父母現世不在。其所在は知りぬ。春日明神へ  
祈願とめ。法教の違あつて。社参。下向する度。小此杉の下。立寄院羅尼  
を誦し十念と唱るも。父母存命あつて。息災延命の祈禱のため。おつて。死

しおむ。後生善所の為なり。世上の命を皆父母小孝艱を尽くとある。小と由良  
弁乃。如何あれ。幼少にて。倒稀ある大難。小遭。適師匠の慈悲心。死す  
一命と助けられせむ。父母の名所を。知れぬ。御在家と尋ね。命便りなく  
さ。慈母の三十余年の永れ。年月緒團の深山荒野を。尋ね。迷ひ。餓凍ひ  
し。成も。ま。我の飽す。小食ひ。温小衣。先陰を送り。不孝の程。悲  
くれ。れども。神佛小捨られ。春日明神の御利生三密の冥助。小より。海中の優  
曇華小勝。実母小廻り會。忝け。きよと。春日の宮社を。遙拜。歡喜  
ある。更限り。老母と乘輿。小駕。東大寺へ。歸り。沐浴させ。衣服を。著。更  
く。一室小住。朝夕孝艱を。尽く。世人皆。其奇縁を。感。老  
母ハ号年の望。足て。昨鳥の飢寒。小相。及。錦衣。王食。小飽。髪を。剃。佛門。入  
且。夕續。經念。佛。八十。方。存生。して。終。小往生。の。素懷。を。遂。長。弁僧



正八母公の靈と二社の神小鎮糸リ。子安明神と号し。朝夕參詣ありしと云々。其約今猶南都大佛の乾の隅あり。小兒の諸病を祈まむ必し驗有と云々。

近州石山寺建立

從奧州始獻黃金條

却說大佛の銅像成就しを聖武天皇御歡喜斜ありと云々。佛跡小押あり。宿無り。此義如何を群臣と集て御評議あり。吾朝いまだ黄金を産する地なれ。世上所有の金錢を聚め。宿小寺て押入り。別小手段あり。前より此時代まで。一人多々を左ありて。世上の財減して。万民の融通を妨ぐ。宿を宜うと。猶百般評議の上。和州金峰山金を産する山なり。金の御藏とも稱され。彼山を掘せり。自茲金と得。更りやゆらんと。一は奏聞。中々多。天皇笑ひて思召。然るを先金峰山の藏王権現。小其由を告。然して后山を掘し。む。とて良弁僧正を勅使。

て金峰山へ赴り。良弁僧正勅詔を奉り。芳野へ。蔵王堂へ參詣して

勅宣と續山を掘て金と求む。宿を祈念し。其夜堂内小通夜。法絶の煙

火續續せ。頻り小睡眠。さ。寢とも。同睡。蔵王権現形

と現。枕頭。小良弁小告む。今般帝盧遮那佛の銅像と造り。小

其宿小用ひ。小當山の金。堀せん。小睿慮。宜。我山の金。い。堀

取。時節。未。未。自。金の出。期。但。江州勢田

の。小觀音。有。縁。の。靈。場。あり。彼。所。小。一。字。の。堂。舎。と。建。之。如。意。輪。觀。音。の。像

狀。作。て。安。置。し。て。黄。金。と。祈。求。む。遠。く。も。し。て。倭。國。の。中。小。黄。金。と。産。出。せ。出

来。し。金。と。獻。む。人。有。て。宿。十。小。調。卷。し。此。首。と。奏。聞。し。と。昔。の。と。見。て。云

々。良。弁。奇。異。の。思。ひ。を。申。夢。想。小。任。し。て。芳。野。と。立。都。歸。り。て。權。現。の。御。と

帝。へ。奏。聞。せ。し。を。並。に。近。江。國。勢。田。の。郷。小。靈。場。を。見。立。觀。音。堂。を。建





良弁僧正石山  
釣るる羽ふあひ履  
音全て勸請  
とぐん地の西  
と稟ゆへ

良弁僧正



比良明神の化身



三。黄金の出る地を祈る。是を良弁小僧のひる。良弁僧正の初  
 命。心ど江明。赴丸。丸田の郷。いりて何所。観音の霊場。なる。ゆえに。此  
 北を能。御。とある。山中。分。登りて。え。奇。石。怪。岩。罅。と。て。左。を。仙。境  
 の。と。も。れ。此。所。を。観。音。の。霊。場。と。い。ふ。一。山。を。見。廻。ら。れ。小。山。中。一。流。の。清  
 水。あ。り。其。汀。の。岩。小。腰。あ。り。て。釣。を。垂。る。翁。あ。り。僧。正。を。見。く。釣。を。う。け。如  
 何。良。弁。我。此。所。在。て。你。を。待。更。久。と。曰。知。己。の。言。々。る。僧。正。心。發。た。是  
 凡。小。わ。を。神。仙。か。る。と。思。ひ。進。寄。て。拜。を。お。拙。僧。い。ま。仙。翁。小。相。見。せ。更  
 あ。れ。小。名。と。知。り。脚。身。何。人。在。と。や。と。向。ま。る。小。老。翁。微。笑。し。你。ま。つ。む。や。我  
 と。是。比。良。明。神。か。り。此。山。と。観。音。有。縁。の。霊。地。か。り。你。此。地。小。堂。宇。と。建。て。観。音  
 を。安。置。し。丹。書。と。凝。り。て。祈。る。あ。を。求。る。所。の。黄。金。必。と。東。國。より。出。く。王。家。へ。献  
 を。を。し。又。此。池。の。觀。音。の。功。徳。水。と。湛。れ。を。未。代。ま。く。衆。生。の。疫。病。と。救。く。茶。水

一。勤。め。と。教。示。の。心。神。風。小。乘。比。良。が。嶽。の。文。飛。去。の。良。弁。僧  
 正。感。涙。と。も。小。脚。後。を。伏。拜。と。急。死。都。を。歸。り。て。比。良。明。神。の。御。教。示。依。て。觀  
 音。の。霊。地。を。尋。得。し。義。を。奏。し。や。ま。を。帝。唐。感。す。く。工。匠。小。命。と。彼  
 所。小。佛。堂。を。建。す。め。良。弁。僧。正。佛。師。小。未。て。如。意。論。觀。音。の。像。と。刻。ま。す。其  
 腹。内。小。彼。父。母。の。記。念。の。觀。音。の。像。八。寸。を。納。め。物。の。腰。け。る。山。石。と。其。堂。座。と。て。堂。内  
 小。安。置。せ。れ。る。今。の。石。山。寺。是。なり。斯。く。佛。堂。本。尊。と。も。成。就。し。る。良。弁。僧  
 正。を。佛。前。小。奉。毫。毛。して。千。千。陀。羅。尼。普。門。品。を。積。福。し。心。小。伯。代。の。金。と。得。さ  
 せ。又。と。細。祈。せ。れ。る。小。靈。驗。空。り。ず。天。平。十。六。年。真。州。の。團。司。百。洛。王。茨。福  
 百。倍。國。より。日本。へ。渡。り。日。國。小。田。郡。より。始。て。黄。金。を。掘。出。し。煉。金。二。万。三。千。六。百。兩。を  
 真。列。の。團。司。が。と。り。都。へ。献。上。す。是。日本。小。金。と。産。む。始。り。聖。武。天。皇。御。欣。悦。限。り。なく。編  
 小。藏。王。推。現。の。靈。告。石。山。寺。の。觀。音。の。利益。す。大。造。と。せ。し。盧。遮。那。佛。の



功德小なる所なりとて、三宮御飯依深く、百濟王敬福の宮位を昇進させ、  
祿を増加し、良弁僧正の賞物と給り、大伴家持倭國の貢  
金の始て出、更を祝し、和哥小曰

とあらざら、御代さへんと東ある陸奥山の黄金をよま

斯く大佛の宿願の佛鉢の押江洲紫香樂郡の大伽羅を建て、安

置下り、寺と甲賀寺と号け、肉眼供養、嚴重執行の、帝群臣と將て御

幸なり、ゆゑに近國遠國の貴賤老若群集して感涙を流さざり、者か

二十二年太上天皇元正天皇山崩御より、御尊殿と大和國添上郡奈保

山の陵を葬り、なり、御年、聖武天皇室位を皇太子の禪らせ、此君を

四十六代孝謙天皇とよま、即ち女帝とて、御禪、阿内親王高野姫とせ

了。聖武天皇の皇女、御母、光明皇后なり。天平十年、皇太子を立せ、今年

十善の帝位、即ち天平二十一年改元あり。天平勝寶元年とて、先帝

太上天皇の尊号と奉り、行年、太上天皇甚

と御悼惜、四月紫香樂郡甲賀寺の大佛を平城の東大寺小

曳移し、大伽羅建立の始、聖武天皇亦、御衣の御袖、衣

と檀を築初め、百工精力と励、今年大佛殿成

就し、諸を佛像と移し、佛供養の儀式、嚴重執行せ

り、太上天皇光明皇后及び百官、皆率て東大寺、御幸、

せ、余文を作らせ、先年佛徳、因、奥洲より、始て黄金と出せ、其御

歡喜と佛前、其文、曰

敬白

三寶之奴奉、廬遮那像前、此大倭國者、天地開闢以來

三寶之奴奉、廬遮那像前、此大倭國者、天地開闢以來



雖有黄金自入國獻之未有斯地時國中東方陸奥國之王  
從五位上白濟王敬福自部内小田郡獻黄金此敬馬悅  
佛慈賜焉恐戴持率三百官奉禮拜焉

十善万乘の君之佛像を崇めりして三室の奴と嫌り初め一程の御更ふ  
むむ増て況や供奉の公卿末の身狂れ輩猶以て恭敬禮拜し一各佛  
名を称して尊まざる此日の導師の善提僧正とて南天竺より来朝せ尊  
れ名僧なり寺中小相結し五千人の僧徒各妙徑を續誦し入佛供養を  
更なれども殊勝して聖衆も茲亦未降り俱小供養と受りしと思ふ  
許や上下の感涙を流しける斯て大法更滞りたり果されん奉天  
皇光明皇后を始り供奉の百官まで下向有都て今日の儀式ハ元見の礼  
式と等しく公卿大夫汝くの輩まで皆礼服と整て供奉し更なれん其

壯麗なる更諸人ふ眼茂きまきまより更なり聖徳太子佛法を弘めり  
より以来の法會の法式今日の日如く嚴重威なる未有之儀小佛法嚴示昌の  
時といふ也且観今日の導師と成り善提僧正と南天竺の名僧なり  
五基山の文殊菩薩を拜せん南天竺を出て大唐へ渡り五基山へ登  
りける山中にて一人の老公翁小逢ね翁が曰你ハ何國へ行や善提答て我  
と當山の文殊菩薩を拜んぬ登山とるなりと曰れん公翁が曰文殊ハ山  
小不在今ハ東海の日本小純生り也你文殊菩薩を拜せん公翁曰日本へ  
到る事と教へ忽ち虚空へ起去る公翁善提也公翁の後と禮拜す  
それより下中日本へ渡んと船小乗海上公走らせたる海上下り  
の僧佛哲といふ人是も日本より入る船小大海と渡る難風小遭り船を  
損ひ難流不及漂ひたる小往會巨細を安んず善提我船小佛哲と味り



唐之南知

も小日本とて舟を走らせし。其後善提佛哲と菅原寺へ迎られし。先年より菅  
原寺の側の岡に一人の翁拙く其姓名を知らず。二年以来言を又記され  
む。諸人啞の聲なりとと思ひ。然も彼翁折く首とて東の方を望みんけ  
るが。今善提佛哲が来りて菅原寺へ入る。翁俄に起り其身も寺へ  
入善提佛哲と手と携りて相語り。時あるか縁熟せるかと信ひ。三人  
ひひ舞躍り公羽が寺と立出其行所を知者あり。後公羽が伏居する所を  
伏見の岡と号け公羽を伏見の翁と呼ぶ。実小希右の晴人なり。斯く  
後小善提佛哲も小帝御信仰ありて兩僧も小僧正の宣と授けむ。ひ  
たり。本朝樂部の中善提校頭の舞林邑の樂ある。其此善提佛哲が傳  
所なり。後年淡路の廢帝の天平寶字四年二月二十五日小善提僧正を  
遷化せし。天平十年小遣唐使大伴古名が歸朝の節唐の揚州竟興

行基二僧と迎へる。谷をたると旧より相織人の。即ち行基寺と詠  
て曰。靈山の親辺の御前契りて。真如朽せど逢えつる。其時  
提返寺と詠じて曰。迦毘羅會ふも小契り。甲斐ありて文珠の御貞逢  
えつる。斯く行基兩僧を伴と都へ歸り。帝奏し兩僧小天顔を  
拜せし。帝大に歡喜し。二僧と大安寺小止宿せし。行基

唐之南知



寺の僧鑑真来朝し、これを帝東大寺に任ぜり。此鑑真、揚州江陽縣の産なり。戦國の時、各の弁士淳于髡が後胤たり。博く経論を渉り、又医療の術に通じ、戒律を精く。唐土より持来るところの佛舍利三十粒、阿育王の塔様銅支提止觀を義文句、菩提子三斗、晋の王羲之が真行の書一卷、亦と献上し、之を聖武帝甚く敬す。御崇敬す。鑑真を戒師として受戒し、之の曾て一切経論の往く誤する字と校正せり。是れ能正する者なるも、小鑑真を一切経を暗記し、悉く其誤字と正し、又諸茶種の真偽を分ち、其名を付し、小鑑真、真を以て香と嗅、其真偽を分ち、一品も錯り并支なり。光明皇后、御不例の時、鑑真、御茶と進せり。之れ忍ち強ありて、御平愈か、之れ是れ小僧に依りて、大僧正の官と授けり。之れ僧勢煩雜なるも、改めて大和尚の号と賜ひ、備前國小於て水田二百町と給り。又新

田部親王の旧宅を給りて、寺院とす。今の招提寺是なり。此鑑真も天平宝字七年五月七、才めて遷化せり。菩提佛舎鑑真、皆聖武帝の御般僧也。聖武天皇崩御、惠美押勝、綾君、富直、天平勝宝八年、太上天皇、武去年より、御懺悔せり。之れを医療す。小及みず。緒社の祈禱、緒寺の加持、丹誠を由でざる方なり。且天下小大赦を行れ。艱寡孤独の者、貧窮の者、老昧の者、亦米銭を絶し、賑恤を以て、少く御快氣の体、ふんえませり。又御懺悔再發、之れ終小室を五十六才、小崩御なり。光明皇后の御愁傷、ハ中も更なり。當今、緒臣下の悲歎、大方、之れも、有果を、亦非れ。泣く尊嚴を、又御葬式の禮を、嚴重として、和州佐保山の陵、小葬り。是れ悲し、御の前、小御髪を、之れ御法名を、満勝と号し、之れ是帝、

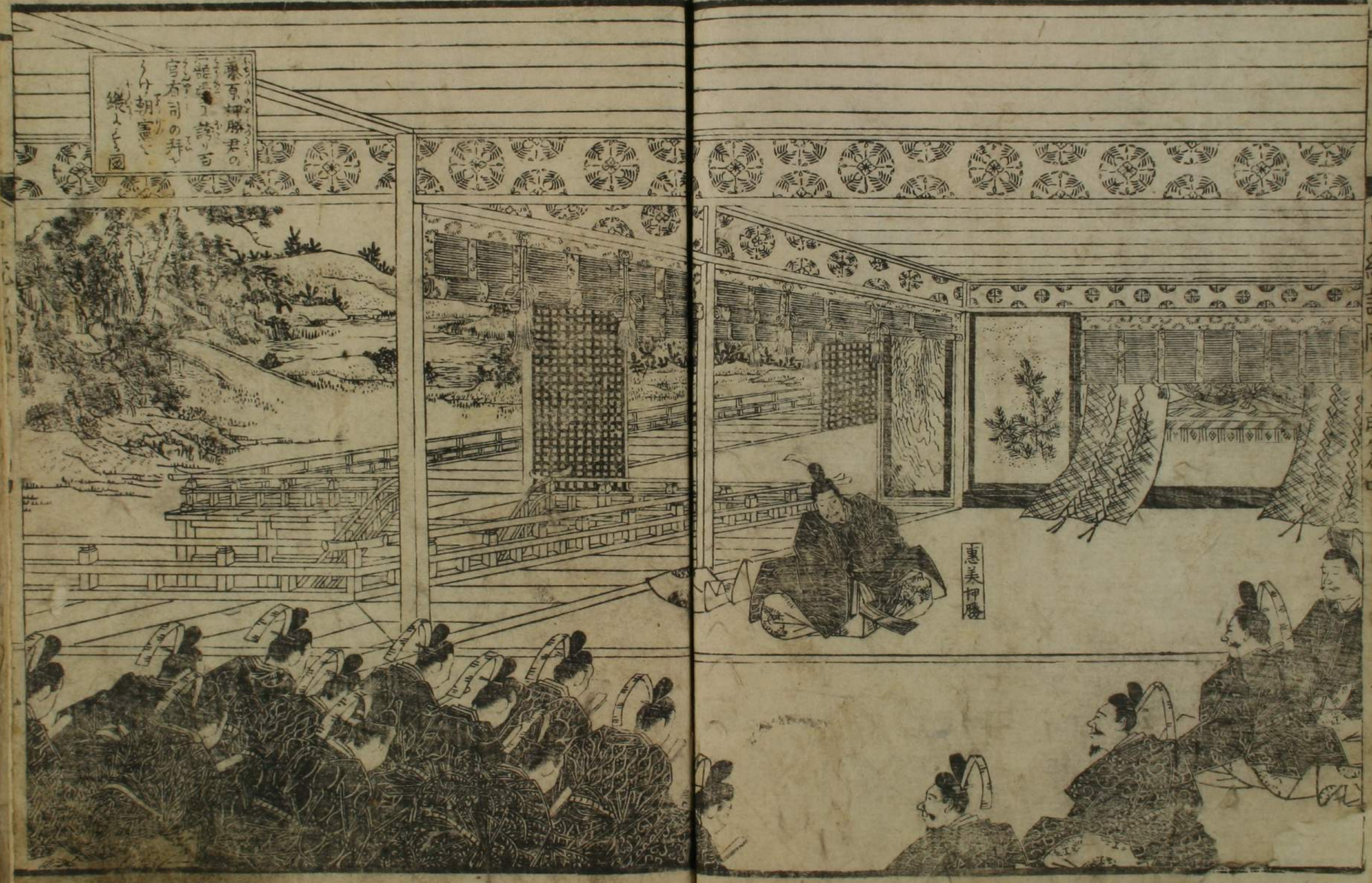


乃始なり抑おさ此帝このみかど八やたて佛法ぶつぽうを崇たかぶるも、本朝ほんてう小出生せうしうせし名僧なそう、  
謂いは行基ぎやうき、良弁らうべん、道慈だうじ、泰澄たいじやう、其余そのあとの八や并ならぶ違ちがひ、異國いこくより来朝らいてうせし、  
僧そう小せう善提ぜんてい、佛哲ぶつてつ、道璿だうせん、鑑真かんしん、佛ぶつ法ぽう中興ちゆうきやうの君きみとす。斯かくて其その年としも、  
綜圖そうずの忌い小せう立た暮明ぼくめいと、天平勝宝ていへいしやうほう九年くわんねんの春はる小せう成なりる、其その正月しんげつ改元かいはんあり、天  
平宝字ていへいほうじ元年ごうねんと号なづせん。同おな正月しんげつ小せう左大臣さだめ正一位せいいつゐ播磨はりま諸兄しよあに卿きやう薨かう去され、  
邁まい齡れい七十四しじゆなり。孝謙かうけん天皇てんかう甚こく惜おしませし、紀餘きよ六む呂りよ石川いしかわ豊人ゆたか亦また遣つら  
されて葬さう祭さいの妻つま嚴げん小せう執行ぎやうぎん色いろ多たなり。此この諸兄しよあに卿きやう敏達みんたつ天皇てんかう六世むっせいの孫まご美  
奴王みぬわうの子こなり。天性てんせい智ち才さい秀博しゆはく、學がく多た能あたる中ちゆうも、國學こくがく小せう精せい、和哥わが小せう如に  
して大伴家持おほのともらむととも小萬葉集こまんやうしゆ以もつて選えらまれ、諸兄しよあに公きみいささ高城王たかしろわうとす  
す。時とき從三位じゆいざん而して聖武せいぶ天皇てんかうの御前ごぜん伺候きりこ有あり、帝みかど諸兄しよあに公きみを御ご電でん遇ぐ乃  
余あま小せう南庭なんていの橘たちばなの実みを召めきて、御ご土つち善ぜん小せう添そて賜たまはり、祝いほひし、御ご制せい小せう曰い

とらむかハ実まことさく花はなさくとの葉はさく枝えだ小霜こしもおちまうて常盤木とねいばき  
く遊あそぶと橘たちばなの姓せいをぞ給たまはり。されば緒兄ゆあに公きみの御子ごし孫まごハ故所こところ小橘こたちばなと用もちひ  
らるると。此人このひと井出いでの邑さと小住せうぢゆうと、井出いでの左大臣さだめとも稱なづかり。是こゝろハ且またおち  
當今とうこん先帝せんていの御遺勅ごいぢやく依よりて中務卿なかつむぎきやう道祖王だうそわうを以もつて皇太子すめみま小立こたてひ、  
是君このきみハ新田部親王しんたべのちかの御子ごし小。天武帝てんむていの御孫ごまごなり。然しかも其頃そのとき大納言おほののりごん藤原  
仲なかつ小名なと、武智ぶち丸まるの三男さんなん小。右大臣みぎのちか豊成ゆたかの舎弟しやていなり。孝謙かうけん  
天皇てんかうの御ご電でん愛あい甚こく、之これを以もつて仲なかつ小名な権威けんゐと志こころす。曾まごて舍人しやにん親王ちかの  
御子ごし大炊王おほのき小我女ごがめと娶めとり。自みづか分のぶん護ごの中ちゆう小美みく、殿宇てんうと造つくり、紋もん小大炊王おほのき  
夫婦ふうふと住すりて相睦あひむつたり。何なん平へい皇太子すめみま道祖王だうそわうと廢あきらめ、大炊王おほのきと儲たくら  
して、己おのれ外戚がいせきの威ゐと逞たくましむ。天皇てんかうを兼かねて仲なかつ小名なと帳内ちやうない小近ちかけ、御内ごない電でん在あ



藤原押勝君の  
能く詩言  
官有司の拜  
くけ朝憲  
樂人等



惠美押勝



ありきりし(仲)名を奏する東大となく小となく用ひし今度の奏とも信  
 りて。太子と廢し大炊王と太子小立を命ぜり。諸臣下(勅)詔のいふに群  
 臣大に發死列位自を見令と一言も發する人なし。時小仲名呂の兄右大臣豊  
 成堪りて位階を進み出倫言ふてハいとも道祖王の御妻先帝の御遺詔  
 小皇太子小立せのひ今させる御過ちもかた小廢し玉を悲おはさるる  
 といと練奏中されれども天皇敢て御許容なく。遂に道祖王を廢し大炊  
 王と皇太子小立のひし。是君も天武帝の御孫おてこそせの御又も舍人親  
 王たり。後小淡路の廢帝とせり。去程小天皇小仲名と御寵愛の余り小紫  
 微内相といふ官と授けり。是禁廷内外の武臣と司と重任おて其作法か  
 大臣のてり威勢兄豊成の上小出者秘日小増長。朝廷の公卿を慢り狂ん  
 ば。頗る我意の舉止多かりければ百官百詈唾吐して仲名と己心憎まざること

者なり。茲小橘緒兄公の嫡男小橘奈良丸と入りり。仲名君富小袴リ緒  
 臣下と茂か。恣小太子と廢せし。我意を志怒り。大伴古名大野東人小と  
 ころひ仲名と討亡前太子道祖王を立て。帝位小即も高議し。仲名を  
 右大臣豊成とれきて大の發死と成り。とて奈良丸の館(是れ  
 對面)と朝廷の得失と談。今仲名と誅せんとの企。宜れども天皇深  
 く御見負あれ。御身達の後難の程も量。依て須史此一織で延し。是予仲  
 名と緘りて。向後不法の動止あれ。早の早の省おれ。歸て仲名と紳  
 と命れ。工夫を回され。小仲名早も奈良丸古九の企を止出。て大の立  
 即時小奈内。て奈良丸古九東人小君を領け。道祖王と王位小進。人  
 を企め。尾鱈を添て。練奏し。る。天白甚。逆鱗。のひ仲名小奈。一  
 火急小征兵と。向し。道祖王と先。奈良丸古九東人以下と。擲り。捕せ。のひ



是非の分明も及せらるるに及ばず、殊に其妻子徒類を皆遠馬に配流す。其薄情より死せるを右大臣豊成の彼輩の隠謀と知るが、疾む由公の其罪を以て筑紫に流罪せしむ。是皆仲乃が計り所あり、諸人其心もあつた。是非を論ずる人もなく、皆仲乃と疫病神のごとく忌悪とする。其後天平宝字二年八月、孝謙天皇帝位を太子大炊王の禪らせり。其より孝謙帝と高野天皇とをたぐる。高野皇太子乃を愛し、其愛倍甚く、右大臣小任の嘉賞して宣う。大祖大織冠鎌足より以来、世々明德を以て王家を興補し、万民安寧を得、國家乱まざる。良小此右大臣有由。昔伊尹も有莘の湯臣なり、一度成湯を佐て、遂に阿衡の号を荷ひ、呂尚も涓涓の遺老なり。且文王を弼け、終に營丘の封を得。今右大臣、汎く民を惠の美古より、雙かく、惡と林示、暴と押へ、于をを静り、乱を勝の功あるを、其姓の中小惠美

の二字を加へ、名と押勝と改む。姓も藤原惠美押勝とを賜り、斯御貝員の上、四年小従一位を授け、太政大臣小任の、高野皇度、押勝の邸宅へ行幸あつて、遊宴を催し、二年の秋、三公九卿を召集し、紹のひたる。藤原不比等、其勲功天下に雙かく、且王家の外戚たるが、以て先朝正二位太政大臣を贈られ、文忠公と謚し、官位已小極りぬ。猶足る所あり、八周の太公の先蹤を準ど、近江國十二郡を以て封じ、淡海と謚し、余官、故の如く、又押勝が望を小任せ、武智上呂房前も太政大臣とを贈り、ひたる時、唐朝にて八賊臣安禄山謀叛を起し、玄宗帝蜀の國に落、唐朝大亂せし由、これに朝廷にて御評議あり、彼安禄山叛逆を以て、且勝利を得るも、遂に敗績し、此國の鎮西に襲ひ来るまが、其備を成むるを、大臣唐土より兵學陣法をも學ひ得、これを西戎防ぎの爲、太宰府へ



られ西國の海辺不要害と構へ唐船の寄来るを防禦の備へを為しめられける

感夢想太后儲浴湯 改鑄新錢條

太后光明皇后。天性佛道を深く信じての先帝武勳を以て諸國おま  
院を尋く建立あり。又東大寺お大佛殿を造管し或は施茶院悲田院を建て  
晋く飢人病者と恤惠を以て食とよ業と絶と木の功德を積むを稍御心  
小我身許佛道お飯依深き者おあど。自負の想ひを生じのひるるお一夜乃  
御夢お殿中の空お怪しれ声有て太后さめ佛法お飯依深きを鑄り慢ら  
更ふれ夫供佛絶僧の業を廣大お除限有てを。萬躰の佛を造り千字  
の堂を建るとも。心お慢むる時ハ其功德雷栗の如し。人の為お悲んじむる時々  
一佛と供養一僧お布施とるとも。報と得て大海の如し。但し浴室お濯其  
功德莫大なる更敢て余更の及とらわらむ。只浴湯と殺けて慢心の垢を洗

ひと叫ぶるよと思召む忽ち夢覺り。太后御身お冷汗を流し愧心生じ  
此上と夢の告お任し浴室を建て貴賤をえらびて入湯せしめんと誓願と起  
し。都の中お地をえら大いある浴室を造建しめ貴賤とも入湯を免と  
れ。昔と晋く世上へ觸させのひ猶も太后御手は千人の垢を洗ひ去んと  
誓ひせのひれむ。上皇兼當今大政を首なる。諸卿中此義お余り狂くし。脚  
更かれが思し止すのいと練めたり。れども太后更お承引をせ。女無比乃大  
願と殺し心お決せりと宣ひ。毎日お浴室へいり。貴とわ賤とわ入  
湯する程の者の垢を至尊の御手お洗ひ去る。お入湯の諸人。是は八お  
心ありと辞退し。れども太后強て勸めり。お御意お任せ。皆難有涙と  
流し。去程お入湯と願ふ者絶回なり。己お九百九十九人の垢を洗ひせのひ  
今一人お満願とると。思召とらふ。一人の年老る法師の癩病人。お汚



浅猿あさるしれすげ女にあり入り湯をいる小の全そ躰ら腐ら爛ん膿う血ち流か其の臭くされる限り  
わら中ち近ぢ付づかりをれ大お后の由ゆ是こ汚けりぬ癩か者いと忌疎しのう色いろ在あ  
まま又また思おもふふ不ふ可く妻ま願ね望ぞ是こ一ひと人ひと満みるる汚けりぬとも  
何なにと忌避ひんやとて臭くさ穢せをを堪た忍しのびぬ癩か者いのせ背せと洗ひぬ垢あを去りぬ癩か  
病人びやうにん太后たいこう小こ向むかひぬ皇后こうご尊うやれぬ御ご身みと以て我們われら如ごときの惡あく病びやうの者小こまで御ご手て  
然しか正ただしのよとと難有がれ我此こ業ごう病びやうを患るる更さら年とし久ひさく百般ひゃく小こ医い療りょうを施  
せも更さら小こ強かなり但一ひと或ある名な医いの中せら八はち你あなたが此惡あく瘡そう人にんの口以も膿う血ちを吸  
吸す出ださむ必かなと愈むる更さらと得ぬと教しへぬ世よの人我われを疎て膿を吸  
出だし得せぬとり者ものなり故今いま日ひまで苦悩なうを受いたり中ちゆう也や恐おそある更小こ  
から皇こう后ご大だい慈じ悲ひを垂ゆり我われ瘡そうの膿血ちを吸出だしぬと願ひたり小こ  
その太たい后ごはあれぬと忌疎しませぬ争りさる汚りぬ業ごうととれと思おもふる也や



